誰のものでもない中也—ごあいさつに代えて
中原中也記念館館長　中原 豊

松本 隆インタビュー

◎特別寄稿
lyrical murderer
一枚絵に寄せて
浅田弘幸

◎寄稿
死と哀悼—公開講演要旨
栗原 敦

◎常設テーマ展示
「『山羊の歌』まで」

◎特別企画展示
「月光とメルヘン」

◎企画展示ピックアップ
「湯田温泉物語」

◎新収蔵資料紹介
「白痴群」第6号
『ぴちべ、ハーさんフーさん小母さん』
小出直三郎「けんかでない絶交」

◎記念館ニュース
VOICE SPACE CD「声のまぼろし」発売
詩の朗読会—心も声も響かせよう
「月光とメルヘン」関連イベント

主なできごと（平成21年度 行事記録）
第15回中原中也賞受賞作品
平成22年度 行事予定

ゆふがた、空の下で、身一点に感じられれば、万事に於て文句はないのだ。（「いのちの声」より）

中原中也記念館
館報2010

15

Public relations magazine
第15号

Chuya Nakahara Memorial Museum

誰のものでもない中也
―ごあいさつに代えて

中原中也記念館館長
text=Yutaka NAKAHARA
中原 豊

二〇〇九（平成二一）年四月、十五年にわたって中原中也記念館の発展のために尽くしてこられた福田百合子前館長が名誉館長に就任され、代わって私が館長を務めることになりました。力不足ではありますが、今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

新体制がスタートして早くも一年が過ぎました。記念館では、その間に企画展やイベントを通じて中也の世界を発信し、たくさんの中也をめぐる動きを受信しました。その中で最も印象的だったのが、山口市が特許庁に提出していた中原中也の商標登録の申請が認められなかったというニュースです。これによって、中也の名前を使って商品を売り出したりイベントを行ったりする権利は、誰にも独占できないことが明らかになりました。山口市が商標登録を申請したのは、一部の人の利益のために中也の名前が独占的に使われることを防ぐことが目的でしたから、このニュースはむしろ歓迎すべきことだったのです。

特許庁は、商標登録を認めなかった理由を、中也は「歴史上の人物」であるので、誰かがその名前を使用する権利を独占することは公の利益に反するからと説明しています。私が注目したのは、そこに示されていた数々の事例でした。宮城、福島、東京、神奈川、京都、神戸、福岡等々、中也生誕百年の年に山口市以外のさまざまな場所でさまざまな団体の主催で運営された、研究会、展示、コンサートなどのイベントが挙げられていたのです。自分の利益とは関わりなく、ただ中也が好きだという理由で、イベントの企画・運営という苦労の多い仕事に取り組まれていた方々の顔が、そしてそこに参加してくださった方々の顔が思い浮かびます。そうしたみなさんが中也を守ったといっても過言ではないのです。

今後、中也に関する商標登録が認められることはないでしょう。だからといって、問題がすべて解決したわけではありません。権利を独占することができないというだけで、中也の名前を使った商品の開発は自由にできることになります。もちろん、商業活動に一切利用してはならないとか、「歴史上の人物」だから偉人として扱わなくてはならないということではありません。しかしながら、中也に関する事実や詩句そのものが間違って流布してしまうこと、中也の詩の世界を歪めたり、関係ご遺族の心情を一方的に傷つけるような表現がなされることには、十分な注意を払う必要があります。

記念館は、中也に関するさまざまな情報を収集し、それらを正しくわかりやすくご紹介していくことで、不適切な表現や無責任な引用から中也の世界を守りたいと思います。そして、そこでも中也を愛するみなさんのご助力が欠かせません。誰のものでもないということは、言い換えれば、あらゆる人のものであるということです。その「あらゆる人」には、今を生きる私たちばかりでなく、中也と直接親交のあった同時代の人々から、中也の詩を読み伝えてきた人々、さらにはまだ生まれていない未来の中也ファンも含まれます。私たちが、過去を知り未来へ目を向け、今から起ころうとしている中也をめぐる動きにほんの少し注意を向けるだけで、安直な商品化から中也の世界を守ることができると思うのです。

中也を愛するすべての人々と手を携えて、貴重な文化遺産として中也の詩を守り、未来へ伝えていくのが、記念館の使命だと思います。文学館としてまだまだ未熟なところがありますが、みなさんが中也や、中也の詩に注ぐ愛情を糧としながら、あるべき姿へと向っていきたいと思います。

松本隆インタビュー

The interview 2010

Takashi MATSUMOTO & Chuya Nakahara

平成21年11月にCDが発売されたオトナモード（※1）の「雨色（あまいろ）」の歌詞は〈中也の詩集借りてく〉という言葉から始まります。作詞は松本隆さん。20才のとき、伝説のロックバンド「はっぴいえんど」を結成し、ドラムスと作詞を担当。同バンド解散後、作詞家として、多数の曲を手がけ、現在も第一線で活躍されています。平成21年に作詞家生活40周年を迎えた松本さんに、中也への思いと、「雨色」の出だしが生まれた背景について伺いました。（聴き手　学芸担当　池田誠）

中也との出会い

―まず、中也の詩といつ出会われたのでしょうか？

実はよく覚えてないんだよね（笑）。今日持ってきた詩集の奥付は昭和46年になってるから、僕が22、23歳の頃に買ったんだね。でも小学生の頃、僕の父親の本棚にボードレールの詩集があったからそれをよく読んでいたんだけど、そのあたりに中也の文庫もあったかも。

「はっぴいえんど」の頃は（宮沢）賢治をよく読んでいたね。賢治に触発されていたという覚えはある。自分としては中也に影響を受けたという意識はないけど、作詞家になってから、なんとなく似てるなあ、と感じる。中也の濃いファンには申し訳ないけど。どこがどう似ているかっていうのは、自分では分析出来ていないけど。

自分でこれかなあ、ってちょっと思うのは、韻律、リズム感が似ているんじゃないかということ。僕の仕事にとって、言葉は声をともなって発するもの。だから韻律は意味とほぼ同じくらい大事なものなんだ。紙の上に文字を並べる現代詩には欠け落ちている部分。

中也は音楽家だと思う、言葉っていう楽器弾いてる。

―中也は詩のリズムを「ゆたりゆたり」と言う言葉で表現しています。

血管の中を血が流れているようなゆたりゆたりだね。ロックビートは心臓の鼓動っていうじゃない。僕はドラマーだったからリズムに敏感なんだ。

―中也の詩で好きなものは？

たくさんありますよ。

〈茶色い戦争ありました〉（「サーカス」）

〈みなさん今夜は静かです〉（「冬の夜」）

―今挙げられた断片はみんな口語ですが、松本さんの中で普段の言葉と詩の言葉との境目について意識はありますか？

僕はいろんなことやってて、わざと文語使ったり、古語も死語も使ったりね。まあ、基本的には語りですよね。で、中也の詩は活字を目で読むより、声に出して読んだ方がいいと思う。そのもので音楽だと思う。違う血入れると、駄目になる。それはやってはいけないこと。モーツァルトのピアノと同じ。そのぐらい質の高いもの。

本当は詩はそうあるべき。

言葉

―中也がある座談会（※2）で、プロレタリア文学陣営から攻撃を受けます。おまえは古語を使うから駄目だ、というようなことを言われます。それに対して、言葉にそういう区別をしてはいけない、と中也は反論します。

そういうところが自分とよく似ている。若い頃、僕も左翼の人たちからつるしあげにあったこともある。最近、危険だな、と思うのは、「KY」って言葉が流行ってるでしょ。空気読めって、でも空気読んでみんなと同じでは天才は生まれない。おそらく中原中也ほど空気読まなかった人はいなかったと思う。そういった意味で、僕は良くできた弟子だと思う（笑）。

―「はっぴいえんど」の頃から、松本さんの詞には〈味爽（あさあけ）どき〉（「風をあつめて」）のように、漢字が効果的に使われていて、その漢字と読みとが絶妙な関わりを持っているように感じられますが。

僕にとって、ずっと意味と音はフィフティー・フィフティー。それは中也や白秋にも感じるし。比喩のための比喩みたいなのは中也は絶対しないし、気取りで書いてないと思うね。

わりと生き方に対して、まじなのね。で、そういう真摯な態度がいいと思う。

中也の恋人・泰子

あと、（長谷川）泰子さんの影響は大きいなと思う。ずっといつも影がある。彼女のような人に会ったら魅力的だろうね。正と邪を合わせ持っていて、風のように自由な女性。

―どの辺りに女性の影を感じますか？中也は女性を題材にした詩は少ない方だと思いますが。

僕には全て恋愛詩にみえる。具体的にどこがどうってわけではないけど。

たとえば「盲目の秋」の〈おしろいをつけてはいや〉や「妹よ」など。

中也が亡くなってしばらくしてあの人（泰子）が語っているけど、あれは嘘が混じってる気がする。中也の詩の方を信じた方がいい。そういう深読みしたくなるような闇の部分が詩の中にあるし…

―中也・泰子・小林秀雄の間にあった三角関係を、後に小林が深くて暗い穴と形容していますが。（※3）

深くて暗い穴を知らないと後世に残らないんじゃないかな。それはみんな持ってるよね、西行も持ってるし、芭蕉も持ってるし、在原業平も世阿弥も持ってる、それが基本なんじゃないかな。一休さんも良寛も持ってる。

―人間と人間の関係、間の空気に中也と松本さんに通じるものがあるように思えますが。

それはすごく簡単にいうと疎外というか、孤独というか、人間同士、うまくコミュニケーションとれないっていう、そういう割と近代から現代に特有の、

心の闇、暗い部分。それが一番重要だと思うね。「はっぴいえんど」の頃、そういうの追求していた、都会に住む、簡単にわかり合えない人間関係。

空虚、さびしさ、っていう…。中也の場合はお父さんとの関係なんかもあるかも知れない。でも僕にはふるさとっていう感覚がないの、そこは中也と違う。

「芸術論覚え書」の〈手〉

「手」だっていうと割と辞書に載っている手で、どんな手だかわからないじゃないですか。手の重みとか、血が流れている感じとか、しわの付き方だとかさ、で、それを書いていくと、その人の生き方までわかる手の書き方がある。そこまでいくと普遍になる。普通の人は辞書に載っている手で終わってしまうけど、中也は手の中身まで書ける希有な人、口調が平易でわかりやすい、だから軽くみられがちだけど、そんなことはなくて、すごく重い。わかりやすいってことは、最も難しい、それは僕もどっかで覚えた。

天才と普通の人の差っていうのは半歩か一歩しかない。その半歩から一歩の差っていうのが埋められない距離なんだ。同時代には見えにくいけど、時間のふるいがかかると浮かび上がる。中也も同時代ではあまり評価されなかったでしょ。近松も、シェイクスピアも、そう。近松門左衛門が「おれは芸術家だ」といったら周りの人間はみんな笑ったと思う。でもみんな信念があった。

賢治って、童話を教え子に読んで聞かせた、っていうことは子どもにわかりやすく書かなきゃならない。わかりやすいってことは本当に大事なことなんだ。

—ちなみに中也は宮沢賢治を本当に早くから高く評価していました。

天才はわかり合えるのかな。

—松本さんはしばしば「少年」という語を作品に登場させていますが、松本さんがおっしゃる「少年」とは？

少年でも少女でもいいんだけど、要するに純粋で無垢なもの。でもそこで誤解されやすいんだけど、純粋で無垢でも悪い部分があるし、子どもでも邪なところはあるし、平気で嘘つくし、でも、純粋で無垢、そういう清濁があって、人間って生きていく。僕はこうやってこれだけ生きてきてさ、わかったことは、割と一生は短いな、人間の育つのは早いなってこと。孫が生まれたんだけど、1年半くらいで「じいじおいで」とか命令してるわけ。もう意思が芽生えてる。でも命令されて嬉しい自分がいる。そういうの全部ひっくるめてさ、僕は、子供も可愛いと思うし、大人も可愛いと思うよ、要は人間が好きなんだよね、で、中也も人間好きだったと思う、嫌い嫌いっていいながらさ。

—わかり合いたいと思うからこそ、わかりあえないかなしみとかさびしさとかをより深く感じる…

そうだね、それはすごく普遍的なことでもあるんだよね。でも、そういうことをちゃんと描いたものは少ないね。僕はその虚ろな部分を歌で埋めて、言葉で埋めて、40年生きてきた気がする。

「雨色（あまいろ）」

あれは自分が住んでる渋谷の歌を作りたいなと思った。

「情熱大陸」（※4）で初めて自分が詞が生まれる過程を人に見せる事になって、じゃあ、自分のご当地ソングっていうのかな、そういうのを書こうかなと思った。住んでて、目に見えるものを書きたいなと思って。それで、渋谷って考えたら、ふっと中也が浮かんだんだ。何かで読んだんだよね、昔。中也が道玄坂を黒いマント着てランボオ気取りで歩いていたって。

それから道玄坂を歩くたびに中原中也を思い出す。だから歌の出だしは中也でいこうと。で、〈紙の匂い〉は〈手元の角川文庫版『中原中也詩集』を指さして〉この本の匂いだよね。

あれは女の子の本を借りていく、返しに来るかもねっていうのは、いちおう別れの歌なんだけど、まだ未練がましくもう一回会いに行くもしれない口実をちゃんと残していく。で、その本棚から抜いたらさ、そこに空白が出来て、それがその後にベッドに残っている自分の空白と呼応してるのね。

最後にオレンジを置くってのがあって、それはゲーテへのオマージュ。タイトル忘れたけどそういう詩があった。昔、読んだ時、ああ、梶井基次郎の「檸檬」はここからかな、と思った。中也で始まってゲーテで終わる詞ってのも僕らしいかなと思った。

ゲーテも欠点の多い人だからね、あの人は聴覚を信じない。だからシューベルトの曲を没にしてる。僕の場合、人を好きになるのは、その人の欠点も含めて好きになるから。中也もいろいろ欠点ありそうだけど、全部ひっくるめて好き。

—中也がよっぱらって、渋谷で民家の門灯を壊して、留置場に放り込まれた事がありました。かわいいよね。愛すべきひと。いくつで亡くなったの？

—30歳です。

若いね、シューベルトと同じくらい。モーツァルトの方が長生きしている。天才は早く死なないとね。もう一つ中也のことで思うのは、生と死の隙間にいると思う。だから「在りし日」なんだよね。で、良寛さんもそうだった。良寛さんが亡くなったとき、貞心尼が、良寛はもとから生と死を超越してる人だからと言ったそう。

すぐれた詩人は一線を超えちゃうんだよね。

—中也は空（そら・くう）を書く事が多いので、よく

オトナモード「雨色」

詞／松本隆　曲／高橋啓太

中也の詩集借りてく　紙の匂い
いつか返しに来るかもね

寝顔にごめんと言った　乾きすぎて
喉の途中で言葉が貼りついた

ぼくのかたちにベッドに空白がある
空気のように無視して生きてた
君も哀しむかな

ビニールの傘　透明な雨
新品のナイキなのに
煙草探して　あー半年前
君が嫌がるから禁煙したね

渋谷のスタバで珈琲　硝子の向こうの
水の斜線が皮膚の下に滲みる

自由はいつも孤独と紙一重だね
君が望んだ男になれない
ぼくが悪いだけさ

ビニールの傘　女子高生が
怪訝顔　じっと見てる
あのまなざしはどういう意味か
そんな暗い顔で歩いてたかな

はじめて逢った　あの日も雨さ
バス停で横顔見た
長い睫に釘付けのぼく
気付いて微笑んだ

ビニールの傘　ステッキにして
雨色の電車を待つ
置手紙など柄じゃないから
オレンジを枕にそっと置いたよ

「空の詩人」と言われます。それと、さきほどおっしゃった生と死の間ということのつながりはありますか？

色即是空は般若心経だね。空っぽなんだよね、僕もときどき言うんだけど、「空っぽの器になりたい」って。そうするとどんな料理でも盛れるからって。中也も空っぽの空にいろんなものを見てたんじゃない。

―松本さんは「風」についてお書きになることが多いですが。

風はね、動き。見えないものの動き。で、心もそうじゃん。目に見えなくて、動くじゃん。かたちのないものが好き。かたちのあるものはどうでもいいと思ってる。

―色即是空と風の関係は？

同じ。中身は同じ。老子にいっぱい書いてある。般若心経にも。色即是空の「色」は「かたち」だからね。太陽光が当たって色が出るわけじゃない？で、輪郭を把握できる。

「風をあつめて」なんてそうだよね、蒼空を翔けたいと…。

中也って、ずーっと死のにおいがするんだよね。電線のこと書いてても死のにおいがする。一つの言葉でさ、四つぐらい意味がある。

「風をあつめて」

―中也の「春日狂想」に描かれている〈テムポ正し〉き散歩、それが松本さんの「風をあつめて」の世界とつながっているように思えるのですが。

「風をあつめて」は〈ポケットに手を突つ込んで〉（「秋の一日」）の方じゃない？

細野さんって唄下手じゃない？朴訥としてさ。で、詞もさ、「こんな難しい詞よくわかんない」とかいながら歌ってたからさ、意味全然分かってないで歌ってた。曲作ってすぐ録音した、あれは瞬間芸。もうスタジオの廊下にしゃがんで壁にもたれて、まだ出来ない出来ないって、直前まで曲作ってたから。で、できたから聴いてくれって、ああいい曲、じゃあ録音しよう、そうやって完成した。で、無数にカバーされたんだけど、だれもあれに勝てないのね。あの朴訥が最強。無意識の深さなんだ、きっと。

―散歩をしながら作品を作ることはありますか？

僕はどこでも作れるんだよね。喫茶店でも書けるし。集中力が異常に高い。なんか本読んでたり、書いてたりしてるときに、人が話しかけても聞こえていない。まあ危険だからあんまり…散歩しながら書けるけど、危険だよね（笑）。

―中也はよく散歩していました。散歩というものが詩作とどこかつながっているところがあると思うのですが。

彼の場合、もう散歩自体がさ、作品なんだよね。そのときに見聞きした風景、そのものが彼にとって作品なんじゃない？別に詩だけが作品なんじゃなくて。

―中也が「詩的履歴書」に、結婚する年まで、毎日毎日歩き通す、ということをわざわざ書いています。

僕は中也派

中也は何で結婚したの？

―親戚の方とお見合い結婚です。

愛してた？

―あー…

奥さん歌った詩あるの？

―（すぐに思いつかず）ないですかね。

じゃ愛してないんだよ。だんだんわかってきた。やっぱ泰子なんだね。

―晩年入院したときも、小林に対する恨み節を書いて、消してます。

くやしかったんだよ。

ああいう女の子はロック少女に多いんだよ。自由な生き方が好きで、つきあってても、もっといい男がいたら、風みたいにそっちへ行っちゃう。僕はそういう人とつきあった事ないんだけど、周りにはいっぱいいた。珍しくない。

―泰子は中也と一緒になったあと、小林、それから演劇青年と一緒になって、子供も産みます。

で、それから石炭屋だ。

―そうです。中也はその演劇青年との子どもの名付け親になります。

そうだよね。すごい足繁く通って。あと、（泰子に）逃げられた後、引っ越し手伝って。めちゃくちゃお人好しなんだよね。

―で、あとで泣くんですけどね。

泣くんだよね。大好き。ほんとに好きだな。でも、なんかね、女の存在はでかいよ。けっこう。

―小林秀雄みたいに「女は俺の成長するところだった」なんてそんなこといって…

小林秀雄はつまんない男だよ。どうでもいいと思うもん（笑）。僕は中也派。

（平成22年1月22日、東京にて）

※1　平成16年結成の5人組ロックバンド
※2　「詩人座談会」（「詩精神」昭和10年新年号）
※3　小林秀雄「中原中也の思ひ出」（「文芸」昭和24年8月号）
※4　毎日放送制作のテレビ番組。平成21年3月15日放送回で松本氏が取材された。

はっぴいえんど「風をあつめて」

詞／松本隆　曲／細野晴臣

街のはずれの
背のびした路次を　散歩してたら
汚点だらけの　露ごしに
起きぬけの露面電車が
海を渡るのが　見えたんです
それで　ぼくも
風をあつめて　風をあつめて
蒼空を翔けたいんです
蒼空を

とても素適な
味爽どきを　通り抜けてたら
伽藍とした　防波堤ごしに
緋色の帆を掲げた都市が
碇泊してるのが　見えたんです
それで　ぼくも
風をあつめて　風をあつめて
蒼空を翔けたいんです
蒼空を

人気のない
朝の珈琲屋で　暇をつぶしてたら
ひび割れた　玻璃ごしに
摩天楼の衣擦れが
舗道をひたすのを見たんです
それで　ぼくも
風をあつめて　風をあつめて
蒼空を翔けたいんです
蒼空を

日本音楽著作権協会（出）
1004072-001

lyrical murderer

illustration=Hiroyuki ASADA

◎特別寄稿 | *Special contribution 2010* |

一枚絵に寄せて

漫画家
text=Hiroyuki ASADA
浅田弘幸

免疫学者の多田富雄さんが、死者が墓石の下から生前の出来事を現実の事として懐かしむ「能」の話を踏まえ、「中原は、生きながら死者の目で現実を見据えていた」と書いているのを読んだ事がある。亡くなる三週間前に小林秀雄に託した詩稿『在りし日の歌』。「在りし日」とは中也自身の在りし日でも、前年に死別した第一子文也の在りし日でも、過ぎ去った日々の事でもなく、死者がこの世を回想する「在りし日」だったのではないか、という見方だ。

父親からの遺伝で幼い頃から喘息を煩っている。今では付き合い方など心得たものだが、幼稚園に通う頃はそれが「何か」はまだ理解出来ないでいた。夜更けに目が覚めると苦しくて息が出来ず、当時は対処法も喉元を暖める程度のもので、現在使われているような小さな吸入薬の類いは見た事もなかった。酷い時は何日もろくに呼吸が出来ずに苦しむ事になる。喘息の発作が出る度に得体の知れない恐ろしさ、理解不能の息苦しさから、幼いながら「死」への覚悟と諦めの気持ちが生まれたのを覚えている。

母親は聴力障害者で、僕が生まれた時から耳が遠かった。彼女は障害者と思われるのが嫌で補聴器も手話を覚える事もしなかったので、会話らしい会話は親子でも成立したことがない。度々の中絶のせいでこうなったのだと、小学生の時に祖母から聞いた事がある。誕生出来なかった兄弟達。生と死。自分の存在―。少年時代、僕にとってそんな幾つかの鬱陶しいワードはどこか心の片隅に、常に存在しているものだったから、中也の詩に転ぶ準備は万端だったともいえる。出会った十代後半、彼の込めた言葉は真っ直ぐに、染入るように心の一番深い所まで入って来た。どうしようもなく心を掴まれ、あっという間に中原中也は僕のアイドルとなっていた。

中也の詩に魅せられたならば、熱病のように取り込まれた挙げ句に自分までもが道化て、他者に絡み、暴言を吐き、憔悴するのが勝手な約束となる。最後の詩編「四行詩」までを血に入れたら心はすっかり「在りし日」を見つめる態勢だ。小林秀雄が絵画を評するのに、最終的に絵はいらなくなるのが問題だと青山二郎は語ったというが、とりわけゴッホなどは、弟テオへの山の様な書簡・告白が絵の魅力を最大まで引き上げているのは間違いない。中也についても詩のポテンシャルを最大限味わうために「中原中也」という人間の魅力に近づこうとする。だが、近づきすぎると皆、その熱さや悲しみに焼かれてしまうのだ。

二十歳を過ぎ漫画を描く事が仕事として成立してきた頃『眠兎―ミント―』という連載を準備した。過ちから母親を殺してしまい、十代にして「死者の目」を持ってしまった少年が、現実に生きる、生きたいと願うまでの物語。その少年漫画を描くに当たり、僕は出版元である集英社に中也の詩を引用させて欲しいと願い出、当時の月刊少年ジャンプの担当者である武田冬門氏が奔走してくれて実現したのだが、その時、ご存命だった中也の元伴侶である孝子さんが快諾してくれたという報告を受け、嬉しいのと同時に評伝や写真で知る孝子さんが…と不思議な気持ちになったのを覚えている。十五年位前になるのだろうか、東京で行われた伊藤拾郎さんのハーモニカコンサートへ出掛けた時も同じように不思議な心持ちになった。

十年前に出た初画集では冒頭に「骨」を引用させてもらい、タイトルも『骨の尖』とした。この詩における骨が、自分にとっては必死で描いた絵のようなものだと思えたからだ。

ホラホラ、これが僕の骨だ、
生きてゐた時の苦労にみちた
あのけがらはしい肉を破つて、
しらじらと雨に洗はれ、
ヌツクと出た、骨の尖。

僕は中也より十二年多く歳を重ねたけれど、若い時以上に生きていく事に余裕がない。「在りし日」はすっ飛んでいくように続いていく。中原中也の詩は、今も自分の心に同化したまま、ひっそりと、その悲しみと切なさを保ったまま生き続けている。それはこの先も変わる事はない。

去年の夏、中也終焉の地、神奈川県の鎌倉に住居を構えた。今の鎌倉は「がらんとした所なり」（ボン・マルシェ日記　三月十日）とはいえなくなっているかもしれないが、中原中也や小林秀雄の生きた場所を、僕は嬉しく愛おしく思いながら日々暮らし、闊歩している。中也に関係する場所は残念ながら多くはないけれど、彼が暮らした美しい寿福寺の参道を歩き、鶴岡八幡宮でビールを飲み…、三代目になってしまったらしいが、春、妙本寺の海棠が開花するのを楽しみにしている。

今回、館報に寄稿させて頂くにあたり、背景に描くつもりで、その寿福寺はじめ彼方此方と鎌倉を歩き回ったのだが、心の赴くまま机に向かうと、まったく違う絵に仕上がった。ひとつ注釈を加えておくと、人物は中原中也像では無くて、一昨年、『汚れつちまつた悲しみに……』（集英社文庫）のカバーを手掛けた時の中性的なイメージキャラを再び描いた。詩集の装丁は僕にとってこれほど嬉しかった一枚絵の仕事はなく、今回もまた素晴らしい機会を頂いたと心から感謝している。気がつくと、下絵では不機嫌な顔をしていた人物が、色を塗り終わると微かに笑みを浮かべていた…。

◎寄稿

死と哀悼
―公開講演要旨

実践女子大学教授
text=Atsushi KURIHARA
栗原 敦

2010年1月30日（土）
会場：ホテルニュータナカ（山口市）

谷川俊太郎さんの詩集『私』（思潮社、平19・11）に「呈　中也」と添えた「言葉だけに」という作品が収められていました。もっとも深く言葉と関わり、それゆえに、言葉と言葉の及ばないもの（こと）との関係を繰り返し問い続ける詩人の営みを示したものと言えるでしょうか。

「山」や「罪人たちの深い嘆きの感嘆詞」、「大昔に書いた恋文」までもが、ただ「言葉だけになってしまって」いると列記されます。この、言葉と存在の乖離は「言葉だけになってしまって／詩は世界から剥落しかけて……」と受けとめられますが、その後に、「嘘だ！嘘だ！／何が言葉だけなものか！」と反転されて、末尾の二連は「――静けさだ／あとは静けさあるのみだ／案山子たちは尾羽打ち枯らし／藁の頭で黙想し／／どっかの家の食卓の／夫婦茶碗によそわれて／ご飯が湯気を立てている／ほのかに湯気を立てている」と結ばれるのです。

歌を思わせるリズムと、日常茶飯の属目を拾って言葉を越えた本源を指し示すところが中原中也の詩法を思わせて、オマージュを支えています。

詩集表題作の「私」連作の中にある「「私」に会いに」という、〈私が「私ではないもうひとりの「私」〉に会いに行くという設定の作品も興味深いものでした。いわば、存在としての私と「言語によって生まれた」自意識としての私の衝突。見る私と見られる私の「どっちがほんとうの私なのか」、もう「飽き飽きしてる」話題なのに、一方の「私」が始原の行き止まりに、「突然泣き出すから／ほうじ茶にむせてしまう」私。だが結局、「黙って昼の月を眺めていると／始まりも終わりももっと遠いということが／少しずつ腑に落ちてくる」というのです。

そうです、この作品も中原の「とほいい処」（「言葉なき歌」）に響きあっているのです。谷川さんは最後を「日が暮れた／蛙の声を聞きながら／布団並べて眠りに落ちると／私も「私」も〈かがやく宇宙の微塵〉となった」と収めていますが、中原の「今夜一と夜さ」「鳴く」蛙の声（「蛙声」）と宮沢賢治の「農民芸術概論綱要」の中の一句が融合して、遠い遠い始原の微塵から、遠い遠い行く果ての微塵までの間の一粒の〈私〉が、無限の闇の中にひっそりと息づき、輝いているように思われます。

＊

さて、今日の本題「死と哀悼」ですが、誰もが認めるように、中原の詩の根源に、身近な死者（特に重要なものとして、幼くあっては大正四年中原八歳の時の弟亜郎・四歳の死、そして、昭和六年二四歳の時の弟恰三・一九歳の死）がありました。それらの上に、昭和一一年、中原二九歳、愛児文也・二歳の死が重なります。中原晩年の詩作と心境に決定的とも言える影響を与えました。

評伝的には、青木健さんの優れた著書（『中原中也―盲目の秋』『中原中也―永訣の秋』河出書房、平15・5、平16・2）に譲り、作品表現の細部に即して『在りし日の歌』後半部のいくつか、とりわけ「（ポロリ、ポロリと死んでゆく）」の推敲経緯、「春日狂想」を読み解くことにしたいと思います。ただその前に、少し古くなりますが、ちょうど昨日が一周忌の命日だった私の師匠、分銅惇作先生の『中原中也』（講談社現代新書、昭49・11）での言及を紹介しましょう。

私にとって、中原は夜歩きの詩人、月の光の詩人、郷愁の詩人です。それは自身「詩を以て本職とする覚悟をした日」以降、世間一般の生活に枠づけられることを否定して生きようとしたこと、その結果余白・欄外・枠外のトポスを生きることになった故だと思えますが、分銅先生は、「ゆきてかへらぬ」や「月の光」などに触れて、そこに見られる心境・境涯を〈放心〉というキイ・ワードによって意味づけておられました。たしかに、書き手の心境に即して見れば「放心の叙情」でしょう。私はこれを、描かれた場に注目して「死んだ子」のいる「森の中」を「ゆきてかへらぬ」の「林の中」に重ねて考察を深めたいと思います。死者のいる世界は、実は生死を超えた別の世界、遠い遠い始まりと、遠い遠い行く果ての世界が重なって形象されているようです。

「春日狂想」にも、分銅先生の「これはもう〈述志〉などというものではあるまい。まじめにしてはおどけすぎており、おどけにしては、遺言のようにやるせない。」「詩人の末期の眼に映じた人生風景」に他ならないという見事な要約がありました。全く異存がないところですが、私には、始原からも行く果てからも遠い中間にある生の、そのまたあるひとときに佇んでいるほかない存在の証明のようにも見えるのです。

第7回　常設テーマ展示

中原中也『山羊の歌』まで

Yagi no Uta

平成22年2月10日(水)～平成23年2月13日(日)

中原中也は、詩人としての生涯のなかで、『山羊の歌』(昭和9年)、『在りし日の歌』(昭和13年)という2冊の詩集を残しました。そのうち、中也が自らの手で出版したのは『山羊の歌』1冊だけです。

中也は、初の詩集刊行に向けて、並々ならぬこだわりをもって編集にあたります。しかしその想いとは裏腹に、刊行までの道のりは順風満帆とはいきませんでした。

展示では、生前唯一の詩集『山羊の歌』が刊行にいたるまでの道のりを紹介しました。

1 詩集の構想

大正14年、詩人・富永太郎が病のため24歳の若さで亡くなりました。その死を悼んだ友人たちは、遺された原稿をもとに詩集を出すことを計画します。京都時代、富永から詩についての多くを学んだ中也も、その相談会に加わりました。

昭和2年8月、『富永太郎詩集』刊行。中也が自らの詩集を出すことを考えはじめたのは、この詩集刊行がきっかけでした。当時の日記には、詩集のタイトルのようなものがいくつも書きつけられています。また、後の『山羊の歌』には収録されませんでしたが、同じ頃、詩集のための序詩「処女詩集序」も制作されています。

ここでは、日記や詩原稿などから、中也が詩集刊行を思い立ち、さまざまに夢ふくらませていた様子を紹介しました。

2 編集に着手

昭和4年、中也は友人らと自分たちの同人雑誌「白痴群」を創刊します。自由に作品を発表する場を得たことで、詩集に対する想いは一旦落ち着きを見せました。しかし、翌年、第6号をもって廃刊。発表の場を失った中也は、その後しばらく、ほとんど詩作のない時期を過ごします。

そんな状況を打破しようと、昭和7年、改めて詩集の編集作業に取りかかります。

章題、詩篇の配置、本文のレイアウトなどにもこだわり抜いた中也ですが、そんな想いの一方で、詩集の予約募集に対する周囲の反応は思わしくありませんでした。

ここでは、『山羊の歌』編集にまつわるエピソードと、収録作品について紹介しました。

3 中也奔走

昭和7年、実家からの資金援助を受け、『山羊の歌』本文が印刷されました。印刷所は、友人・青山二郎に紹介を受けた美鳳社です。しかし、それ以上資金が続かず、本文は一旦、友人・安原喜弘宅に眠ることとなりました。

昭和8年春、この後およそ2年にも及ぶ出版社探しの始まりです。中也は、友人・知人のつてをたどり、結局、5つもの出版社を巡ることになりました。

①芝書店…友人・河上徹太郎が店主と懇意。
②江川書房…友人・小林秀雄が顧問。
③隆章閣…安原喜弘の勤務先。
④建設社…中也も参加した『ジイド全集』を刊行。
⑤文圃堂書店…小林らの雑誌「文学界」出版元。

昭和9年11月、ようやく文圃堂書店からの出版が決まりました。中也も愛読した『宮沢賢治全集』を刊行した出版社です。その装幀を好んだ中也の希望で、『山羊の歌』も詩人・高村光太郎による装幀となりました。

ここでは、中也が巡った5つの出版社と、『山羊の歌』の装幀について紹介しました。

4 『山羊の歌』刊行

昭和9年12月、ついに中也の第一詩集『山羊の歌』が刊行されました。『富永太郎詩集』同様、大型の豪華本です。

詩集を夢想した20歳の頃、はじめての編集作業に苦心した25歳、そしてようやく詩集を手にし、詩集『山羊の歌』の作者として世間に名乗りを上げた中也、27歳。

中也は、完成したばかりの詩集に署名をして、世話になった友人・知人、著名な文学者たちへ贈りました。

ここでは、校正刷や紙型など、印刷・出版の行程に直接かかわる資料を中心に、ついに形となった中也の第一詩集、『山羊の歌』を紹介しました。

『山羊の歌』

印刷日	昭和9年12月5日
発行日	昭和9年12月10日
部　数	限定200部
判　型	四六倍判(縦259ミリ×横185ミリ)
装　幀	高村光太郎
発行者	野々上慶一
発行所	文圃堂書店
印刷者	小林鉦造
印刷所	美鳳社
頒　価	3円50銭

展示風景

特別企画展

月光とメルヘン

平成21年7月24日(金)〜9月27日(日)

中原中也の代表的な作品に「一つのメルヘン」という詩があります。また、生前発表されず残された原稿に「誘蛾燈詠歌」という詩があり、この詩の第5章には「メルヘン」という題がつけられています。

〈メルヘン〉という言葉を用いたところから、中也はメルヘンの世界を描こうとしたのだということがわかります。

また、メルヘンという言葉が使われていなくても、中也の詩の中にはメルヘン的な世界を表現している詩が幾つも見られます。そして、メルヘン的な世界を描いている詩には、モチーフとして月光が使われている事が多いようです。

この展示では、向川幹雄氏（大阪府立国際児童文学館館長）と北川透氏（詩人・梅光学院大学特任教授）にご監修いただき、中也のメルヘン的な詩の世界と月光というモチーフとの関わりを紹介しました。

展示風景

展示1　これってメルヘン？

メルヘンという言葉は、もとはドイツ語で〈小さい物語〉を表していました。しかし、年月を経て言葉が示す内容は変化し、現在では確固とした定義はなく、幻想的な、乙女心をくすぐるような、漠然としたイメージを指しているようです。中也は、〈メルヘン〉という外来語をどのように受け止めていたのでしょう。

ここでは、メルヘンという言葉を日本に持ち込んだ巌谷小波や、童話作家以外でメルヘン的な作品を書いた先人として宮沢賢治、稲垣足穂などを紹介しました。

また、メルヘン的な詩は文也が生まれた頃からしばしば書かれます。「誘蛾燈詠歌」「星とピエロ」など、初期のメルヘン的な中也詩草稿とともに、詩に登場する〈静御前〉や〈金太郎〉の絵本を展示し、中也がメルヘンをどこから受容したのか探りました。

《主な展示資料》中原中也草稿「誘蛾燈詠歌」「星とピエロ」、巌谷小波『こがね丸』、尾上金城『（教育お伽話）静御前』、綱島亀吉『（少年お伽）金太郎』

展示1

展示2　メルヘンひろがる

詩の言葉の中には比喩があるので、どの表現からメルヘンだと感じるのか言い切ってしまうことはできませんが、人々がメルヘン的と感じる要素は挙げることができます。現実から離れた、何となく、きれいで楽しい感じ。でも、よく味わってみると、その底には、暗いものや怖いものが潜んでいて、月光のさす、夜の世界につながっています。

メルヘンとは、子どものための空想話ではなく、命の根源に関わるような深いものを表現する一つの方法なのかもしれません。

ここでは、中也のメルヘン的な詩を、次のような3つのコーナーに分けてご紹介しました。

Ⅰ「風景」

ふんわりとしたきれいな風景、世界が描かれている詩。

（「湖上」「童謡」「春と赤ン坊」「雲雀」）

Ⅱ「妖精たち」

妖精や架空の生き物など、メルヘンの世界の住人が描かれている詩。

（「幼獣の歌」「この小児」「北の海」）

Ⅲ「道化」

おどけた調子で描かれ、ピエロ、道化などが登場する詩。

（「ピチベの哲学」「道化の臨終」「お道化うた」）

《主な展示資料》中原中也草稿「湖上」（ノート小年時）「童謡」、中也使用スクラップブック、池田永一治・河盛久夫『ぴちべ、ハーさんフーさん小母さん』

特別企画展

月光とメルヘン

展示3

展示3　少年の頃

中也が生まれたのは、明治40年です。京都の旧制中学を修了し、上京するのが大正14年ですから、中也の少年時代は大正とともにあった、といえるかもしれません。

大正時代は、民主主義、自由主義の運動が盛んになった、いわゆる「大正デモクラシー」の時代でした。文学の世界では、理想主義的立場から、個性の重視や新たな表現の模索が叫ばれました。大正7年に鈴木三重吉が雑誌「赤い鳥」を創刊し、その後、同様の童話雑誌が急増しますが、そこでは、従来の子ども向け読み物にはあまり見られなかった芸術性が重視され、弱さや繊細な心を抱えた子どもが作品にあらわれます。

ここでは、主に大正時代に出た詩集や児童文学雑誌の中から、月をモチーフとしたもの、中也が少年時代に読んでいたと思われるものを集めました。

《主な展示資料》『少年世界』、『金の船』（『金の星』）、『日本童謡集』、有本芳水『旅人』、吉田絃二郎『小鳥の来る日』、北原白秋『まざあ・ぐうす』、堀口大学色紙『断章』

展示4　月光とメルヘン

中也の第二詩集『在りし日の歌』には「亡き児文也の霊に捧ぐ」の献辞があります。

詩集は2章立てで、「在りし日の歌」と「永訣の秋」という題が付けられています。詩集編集の前年11月に病気で亡くした愛児・文也との別れが、章題にも深く関わっていると言えるでしょう。

中也のメルヘン的な詩は「永訣の秋」の章に集中しており、これらの詩は月光がモチーフとなっています。月光は夜の世界です。一般的にも、夜は昼間と異なり、あの世にもつながっていると考えられ、現実ではない不可思議なことがおこり得る世界だと思われています。

ここでは、「幻想」「月夜の浜辺」「月の光　その一」「月の光　その二」の詩を、初出雑誌や、モチーフとして使われている「ピエロ」の同時代絵画とともに紹介し、メルヘンの幻想的な世界と、月光のさす空間と、死者の存在する場所が、中也詩の中で一つになっている様を展示しました。

《主な展示資料》「新女苑」、「少女の友」、川路柳虹訳『ヴェルレーヌ詩抄』、堀口大学『月下の一群』

展示5　一つのメルヘン

詩「一つのメルヘン」の世界は、とても不思議な世界です。〈秋の夜〉なのに〈陽〉が射し、〈さらさらと〉音をたてています。この光は、暖かい太陽ではなく、冷ややかな月光を連想させます。やがて〈蝶〉が現れ、見えなくなると〈水〉が〈さらさらと〉流れ出す。中也は、この〈河原〉での風景だけを詩として描いています。

〈河原〉は賽の磧を思い起こさせます。朝なのか夜なのかも判然としない情景で〈さらさら〉という音が効果的に使われています。でも、〈陽〉の音が〈水〉の音へと〈いつのまにか〉変わり…。現実には決して存在しないはずの世界が、印象的に描かれています。

この詩の舞台となったとも言われる吉敷川（水無川）の写真や、ガラスの原料として戦前に多く産出された硅石の粉末を展示し、現実にあるものを詩の素材の可能性として展示しながら、この詩の世界がまさに、〈一つのメルヘン〉であることを紹介しました。

《主な展示資料》山口市仁保産出「硅石」、中原中也『在りし日の歌』、「文芸」

吉敷川（水無川）

【企画展ピックアップ】

企画展Ⅱ

湯田温泉物語

YUDA ONSEN

平成21年9月30日(水)～12月13日(日)

温泉と文学とは深い関わりをもっています。道後温泉と夏目漱石「坊っちゃん」、湯ヶ島温泉と松本清張「天城越え」など、数々の名作が温泉地を舞台にして生み出されました。600年を超える歴史をもつ湯田温泉もまた文学作品の母体となってきました。

この展示では、湯田温泉旅館協同組合や地域在住の方々のご協力のもと、湯田温泉の歴史とこの地で生み出された文学作品を紹介することによって、湯田温泉と文学との関わりを探りました。

展示1　温泉春色
―開湯から幕末まで

湯田温泉の始まりははっきりしませんが、湯田という地名は鎌倉時代の文書に見られます。一方、開湯にまつわる二つの伝説が語り継がれてきました。狐伝説と老僧伝説です。どちらも室町時代、大内義興の治世の頃にあった話として伝えられており、老僧伝説の方は、老僧に義興が与えたという硯が、湯田前町にある龍泉寺の寺宝として現在も残っています。

江戸時代には、湯田御茶屋と称する毛利家の別邸が設けられました。湯田温泉の名を広く知らしめたのは、幕末の動乱期に起きた「七卿落ち」です。また、高杉晋作や坂本龍馬など幕末の志士たちが、倒幕へ向けての企てを密かに話し合った地としても広く知られるようになりました。

文学との関わりでは、室町時代、山口に滞在した明の使節・趙秩の漢詩「山口十境詩」の一つ「温泉春色」が始まりとされています。幕末には七卿の一人である三条実美が和歌をつくりました。

ここでは、湯田温泉開湯から幕末の動乱期までを、開湯にまつわる伝説にゆかりのある資料や、七卿落ちについて書かれている書籍などを通じて紹介しました。

《主な展示資料》大内義興使用の硯（「花形の硯」）、「防州湯田村温泉記」、作間久吉『維新実談七卿芳跡』

左「花形の硯」（龍泉寺蔵）
右「防州湯田村温泉記」（個人蔵）

展示風景

種田山頭火短冊・色紙（西村屋蔵）

展示2　朝湯こんこん
―明治から戦前まで

明治時代になり、温泉地は保養や慰安のために多くの人が集う場として発展していきます。湯田温泉もその例にもれず、だんだんと温泉街が形成されていきました。

明治12年、中原政熊は湯田温泉の中心地に医院を開業し、湯田温泉随一の病院として大いに栄えました。その後医院は養子の謙助に引き継がれ、入院病棟3棟12室を増設するまでに発展します。

中原中也は、少年時代を湯田温泉で過ごし、大正11年、15歳のとき、合同歌集『末黒野』を出版、「温泉集」と題し28首を載せています。種田山頭火は、昭和13年に庵を構え、「風来居（ふうらいきょ）」と名付け、約1年暮らしました。風来居は中原家に近く、山頭火は中也の弟たちと交流があったため、中也の死後ではありますが、中原家をしばしば訪れています。また、山口市仁保出身の作家、嘉村礒多の作品や手紙にも湯田温泉は登場しています。

ここでは、明治時代から戦前までを、ゆかりの文学者の資料などを通じて紹介しました。

《主な展示資料》杯と銚子（中也と孝子の結婚式で使用）、種田山頭火書簡・色紙・短冊、「鉱泉医治効用并療法心得書」、嘉村礒多『崖の下』、「千人湯平面図」

展示3　詩碑が建つ―戦後

第2次世界大戦後、湯田温泉は近代的なホテルが立ち並ぶ大温泉街として発展していきます。昭和25年には新日本観光地百選に入選しました。

司馬遼太郎は『花神』や『世に棲む日日』など、明治維新で名を馳せた長州の志士たちを主人公とした小説を書いていますが、その取材の際には、しばしば湯田温泉に滞在しました。また、随筆『街道をゆく　長州路』には「湯田」という章があり、そこでは湯田温泉に泊まった時の体験から長州の風土や人々の気質が語られています。

歌人の吉井勇も湯田温泉をよく訪れています。湯田温泉近くを流れる吉敷川沿いに、吉井の歌碑（蛍塚）を建てる際にも協力を惜しみませんでした。

大岡昇平は昭和22年、中也の伝記を書くための取材で、中原医院を訪れました。その時感じた湯田温泉の雰囲気は、完成した評論「中原中也伝―揺籃」のなかで何度も触れられています。また、ムツゴロウの愛称で知られる畑正憲の作品にも湯田温泉の名は登場します。

中也の詩「帰郷」の詩碑が高田公園に建てられたのは昭和40年6月です。詩碑建立に携わった大岡、河上徹太郎、小林秀雄、今日出海らが除幕式に参列し、中原家や地域の方々と共に完成を祝いました。

ここでは、戦後の湯田温泉を、湯田温泉の旅館所蔵の文学者関連資料などを通じて紹介しました。

《主な展示資料》司馬遼太郎色紙、吉井勇書簡、「文芸」

【企画展ピックアップ】
企画展Ⅱ
湯田温泉物語
YUDA ONSEN

【湯田温泉発見伝説】

その1　狐が見つけた温泉

今から500年ほどむかし、大内義興の時代、湯田にお寺がありました。その寺の庭には一本の松があり、その根もとに池がありました。

ある夜、年老いた狐が痛めた足をその池に浸し、夜明け近くに帰って行きました。狐は7日間同じことを続けていましたが、それきり二度と来ることはありませんでした。

お寺の僧は、狐が来なくなったことを悲しみ、狐のすみかを探してみると、お寺の北東の方角にあたる山にありました。そこはかつて大内弘世が紀伊の熊野権現を迎えておまつりした山でした。

僧は不思議な気持ちがして、狐が毎夜足をつけていた池の水を手ですくってみると、温かい。そこで池を深く掘るとお湯はどんどん湧いてきました。そして同時に薬師仏の金像が出てきたのです。僧は池に屋根をふいて、そのかたわらに仏堂を建立して薬師仏を安置し、温泉を守る仏としたのでした。

（以下略）

その2　義興を助けた老僧

大内義興の時代、将軍の座を追われた足利義稙が、義興を頼って山口にやって来ました。義興は屋敷に招いて盛大な宴を催しますが、その最中、義興の体が突然しびれて動けなくなってしまいました。いろいろ治療を試してみましたが、効果はあらわれません。その時、一人の老僧があらわれ、袋から小壺を取り出し、その水を義興にふりかけながら呪文を唱えました。すると義興の体はみるみるうちに回復したのです。

老僧は「私は温湯山龍泉の地に住む者」とだけ告げ、いろいろ差し出されたお礼のうち、義興愛用の「花形の硯」だけ受け取り、立ち去りました。

義興は老僧の居場所を探しましたが見つかりません。ある時、仏堂のかたわらの小さな池から不思議な霧が立ちのぼるという噂を聞いた義興は、家臣に命じて調べさせました。

その仏堂には勢至菩薩が安置され、経机には老僧に与えたはずの「花形の硯」が置かれていました。そしてかたわらの小さな池を掘り進めるとお湯が湧き出したということです。

（以下略）

（荒巻大拙訳注『防州湯田村温泉記』を参照）

雑誌「白痴群」第6号

「白痴群」は、昭和4年、中也の発案で、阿部六郎・内海誓一郎・大岡昇平・河上徹太郎・富永次郎・古谷綱武・村井康男・安原喜弘との9人で出した、中也にとって初の同人雑誌です。中也は、後に第一詩集『山羊の歌』に収録される詩篇を精力的に発表しました。しかし、他の同人たちははじめから中也ほどの熱意を持っていたわけでなく、結局、創刊からわずか一年、第6号をもって廃刊しました。

終刊号であるこの第6号は、昭和26年刊の創元社版『中原中也全集』（全3巻）編集時には確認されていたようですが、その後、長く所在不明となっていました。昭和49年、日本近代文学館が同志を復刻した際にも、第6号を除く5冊での制作となりました。

しかし、昭和56年、東京・神田の古書展にて偶然発見され、新聞紙面を騒がす大ニュースになります。日本近代文学館が収蔵し、まもなく第6号の復刻版も、追加制作されました。

そのときの経緯が、元同人・大岡昇平による「忘却と錯覚―「白痴群」第六号騒動記―」（※）に詳しく記されています。

そして平成20年、1冊目の発見から27年ぶりに、同誌が古書展に出現。当館が収蔵し、今年度の企画展Ⅲ「収蔵資料展」で初公開しました。

《「白痴群」関連年表》

昭和4年（中也22歳）
4月、「白痴群」創刊。
7月～11月、第2～4号発行（隔月刊）。

昭和5年（中也23歳）
1月、第5号発行。
その後の同人会で、富永・大岡と中也が喧嘩。
4月、第6号発行。この号を最後に廃刊。

昭和12年（中也30歳）
中也死去。

昭和49年
日本近代文学館、第6号を除く5冊を復刻刊行。
大岡による解説のなかで、第6号の情報提供を呼びかける。

昭和56年
第6号が東京・神田の古書展で発見される。
日本近代文学館が収蔵。第6号を追加復刻。

平成20年
第2・3・5・6号（4冊揃）が古書展に出品される。
当館が収蔵。

※初出「海」新年特別号（中央公論社、昭和57年）。後に「記憶と錯覚の間―「白痴群」第六号騒動記―」と改題、『大岡昇平全集』第18巻（筑摩書房、平成7年）収録。

池田永一治・河盛久夫『ぴちべ、ハーさんフーさん小母さん』

昭和11年2月1日
アトリエ社

現代連続漫画全集の第4巻として発行されたこの本には、池田永一治「ぴちべ」と河盛久夫「ハーさんフーさん小母さん」が収められています。

「ぴちべ」は、昭和8年1月頃から翌年4月頃にかけて「読売新聞」日曜版付録「よみうり少年新聞」に連載された池田永一治の漫画です。

「ぴちべ」とは、主人公の少年の名前で、作者によれば〈元気でピチ〳〵した児をモデルとした〉（『ピチベでかした』）ところから名付けられました。作品の舞台は江戸時代の市井。町人の子「ぴちべ」が、周囲の大人たちをイタズラに巻き込み、ドタバタ劇を繰り広げます。池田永一治（本名「永治」）は、明治22年、京都生まれの洋画家です。明治43年、20歳で太平洋画会附属洋画研究所に入所。早くから画才を認められ、「文展」「帝展」などに入選、洋画家として活躍します。その一方で、装幀画や雑誌のさし絵、さらに漫画、俳画など幅広く手がけ、その画才を発揮しました。

中也は、「紀元」昭和9年2月号に「ピチベの哲学」という詩作品を発表しましたが、この題名が永一治の「ぴちべ」からとられた可能性があります。ちなみに、「ぴちべ」連載のうち数回分の題名表記は「ピチベ」とカタカナになっています。

中也の「ピチベの哲学」には、繰り返しうたわれる呪文のような一節〈チヨンザイチヨンザイピーフーピー〉がありますが、現在確認できる「ぴちべ」のなかにこの言葉は見当たりません。しかし、「ピチベの哲学」にみられるおどけた口調や、月でお姫様がチャールストンを踊るなどといった奇想天外な発想には、「ぴちべ」で繰り広げられるドタバタ劇と重なる部分が多いように思われます。

なお、この度の特別企画展「月光とメルヘン」でこの本を展示しましたが、そのことがご縁で、永一治のご子息である辰彦氏より、漫画連載時の新聞切り抜きを本にした『ピチベでかした』（平成17年3月、私家版）をご寄贈いただきました。

草稿　小出直三郎「けんかでない絶交」

この文章は、『中原中也全集』（角川書店、昭和43年）の「月報Ⅳ」に掲載された小出直三郎「訪問魔中原中也」の草稿です。

平成7年、小出宛書簡3通と小出宛献呈署名入『山羊の歌』を古書店から購入しましたが、古書店のご主人から中原中也記念館に収蔵されたことを知ったご遺族が、その資料を見に来館なさいました。そのご縁で、平成21年12月、小出氏のご息女である下村暁子さんから、この原稿をご寄贈いただきました。掲載された文章とは少し違いがあり、興味深く思われます。

「訪問魔中原中也」の中にもこの文章にも、小出氏が留守の時に、中也が小出宅を訪れ、一言も話さず奥様に『山羊の歌』を置いて行ったことが書かれていますが、この時、奥様のお腹の中には暁子さんがいらっしゃったとのこと。それで、中也さんには何だか想いがあるのよと、暁子さんは語ってくださいました。

小出直三郎氏（1901～1972）は、中也と出会った当時は旧制成城高等学校のドイツ語教師でした。一回生の担任だったとのことです。一回生には大岡昇平、富永太郎、古谷綱武、安原喜弘がおり、古谷は卒業間際に退学したため写っていませんが、他の三人や小原國芳校長も写った卒業記念写真も残されています。

「（一九六六、一、一四）」と書かれた草稿、黒インクの上から青インクで校正が入っています。「訪問魔中原中也」は、この原稿をもとに、更に推敲された文章のようです。定稿には掲載されなかった部分が数箇所あり、そこからも、小出氏の人となりや当時の中也との交友の様子が伝わってきます。

ご家族の写真。
右より、妻・節の妹、長女・暁子、小出直三郎、次女・禮子、妻・節。
昭和11年4月、京城赴任時。

けんかでない絶交

小出直三郎

中原は年長の人に対して年の違いを意識するような素振りを見せたことがない。年の違いなぞを全く問題にしていない人間だった。したがって数年年上の私がせめてそれだけで普通年少の人に与える影響を―相手の反撥も含めて―中原に与えたとは露ほども思われない。また私が何等かの影響を受けるには中原は余りに遠い世界の人だ。私は中原と言う人間の遠い周辺に住んでいた。中原を語るには極めて縁薄き者だ。

たまたま彼の一通の短い手紙が、過去への執着を断つため古い手紙はどんどん整理して行く私の手許に三十何年の歳月を経て残って居り―もっとも彼の名声が高まってからはことさら大切にしたが―そのことが安原君、大岡君と伝わり、角川書店の全集に採録するからと編集者の市田さんから話があった。今まで別に秘密にしておいたわけではないが、詩人中原の生活圏と何の関係もないような私が全集にひょっくり名前を出して、「お前までがか」と思われることの気恥ずかしさに、大岡君が中原の詩の理解のためにその生活の痕跡をつきとめていることをよく知りながら、それを知らぬ顔をしていた。いよいよその短信が採られることになって、市田さんから「大岡先生から、何かその頃のことを書いてもらえとのお話でした。お願いします。」と電話があった時には、電話口で幸い相手には見えなかったらいいようなものの年がいもなく、かっと血が昇って、「書けたら、お報せします。」と頓間な返事をして切った。中原とのつきあいを人にさらけ出すのを恥ずるわけではない。とたんに、私の下宿の玄関に物も言わず、ぢっと相手を見つめてつっ立っている黒ずくめの中原の姿が眼の前にあざやかに浮んだから、どきりとしたのであった。若い時のゲーテはどんなに雑然と人の飲み戯れている中にいても、ゲーテの名だけ聞いていてまだ会ったことのない未知の人が、「ああ、ゲーテってあの人でしょう。」とたちまちにして言い当てたと聞いているが、ゲーテは恐らく才気煥発の話し振り、およそ表情豊かな身振りによってであろうし、中原はその沈鬱、怨念、悲しみをたたえた眼差し、口もと、皮膚の色で一眼でこれが話に聞いた中原とわかる人にはわかったろう。見るからにいわゆる無名の芸術家であろうと推測する外はない風貌だが、画家では決してない、音楽家でもあるまい。小説家ならもう少し世事をわきまえた勿体振ったさかしらの顔をしていよう。ああ「詩人」かと納得するより仕様のない無言の迫り方があった。あの様な感じの人間を他に知らない。生涯に会った唯一の強烈な人間だった。そんなことを言うのは私が芸術家にあまり知り合いがないからかも知れない。強いて誰か他に似た印象を知っている中から探せば、今は名を忘れられているが小説家の富沢有馬君の若い頃画家時代の姿であろう。しかし富沢君にはあの燐火の様な眼の底光りはなかった。ビロードのマントを着て画架をかついで私の住む田舎町を気障にひょこひょこ歩いていた。私は前言を取り消さなければならない。そのことだけでも中原は私に大きな何物かを残した。中原との無縁を主張しようとしたのは、中原の圧力に対して年長を武器にして防禦しながら中原に押しまくられた短い数日のくやしい記憶のなせる言い過ぎだった。

（中略）

時には興に乗って畳の上に立ったり座ったり様々の身振りを交えて話すのを見聞いていると小さな鬼火がいくつか周りに燃え踊っているようで、時々止むを得ず一言二言応答している自分は鬼火にいすくめられて、しびれているような主客の関係だった。

その間に時々自作の詩を朗誦した。これはすばらしかった。一体詩とは言うまでもなく朗誦してその美しさを完全に打ち出すべきもので、それが始めであり終りであると思うのに、日本の詩人で自作を朗誦して人の心に訴える能力を持った人はあまりない。日本の詩、詩人の大きな問題で、私がかれこれ言わなくてこのことを考えている人は多くあろう。高村光太郎がこのことにふれた一文で「しかし中原中也は詩を読むことがうまかった。」と書いているのを思い出す。私の聴いたかぎりでは―と言って数人の詩人しかないが、それがすぐれた詩人だけに、他は推して知るべしと思っている―中原の朗誦はたぐい稀れな美しさ、聴者の心への浸透力を持っていた。「山羊の歌」におさめられている「生い立ちの歌」を「幼年時私の上に降る雪は真綿のようでありました」と始めて各節十七―十八・・・二十四といわば副題も歌いながら続けた。「雪の宵」も好んで歌った。歌いながら酔った眼で泣いていた。全く別の中原を見る思いがして、よかった。これがほんとうの中原なのだろうか。

（中略）

そんな時代に中原は二円※を費い果たして、また私の所にころげこんで同じように遅くまで人を怨み罵り、詩を語り詩を歌った。「おめえ泰子と言う人間をどう思いやす」「いやだね、あんな女は」「ありがたい。そんなに言ってくれるのはおめえだけだ。だがあれは心のきれいな人間だよ」と私をなぶったり、「おめえの学校におれを入れてくれ」「十六や十七の少年といっしょに勉強なんかできるかい。」「いや、おめえのような心の温い生徒監がいるからよ。」こんな話の相手になりながら、同じような形で私の部屋に泊ることほとんど一週間に及んだ。さすがに心身ともに疲れはてて、重い足で下宿に帰り、夜になると中原の来訪の気配におびえて、何とか決まりつけようと決心した。

（後略）

※小出氏にねだったお金。画家の谷中安規は50銭分飲むと飲み過ぎで道端に寝てしまうというエピソードがこれ以前に書かれている。

1 VOICE SPACE CD「声のまぼろし」発売

VOICE SPACEは、東京芸術大学の学生、院生、卒業生を中心とした現代詩を研究する音楽集団であり、中原中也生誕百年（平成19年）に朗読劇「子守唄よ―中原中也をめぐる声と音楽のファンタジー―」で音楽を担当しました。その際に演奏した楽曲を含む新たなCDが、2月に発売になりました。

このCDについて、ほとんどの楽曲を山口で録音しており、11曲中5曲は中也の詩です。彼らの音楽は、単なる朗読や演奏とは違い、非常にユニークなもので、オリジナリティあふれる楽曲に仕上がっています。

CDは、当館でも販売していますので、是非お買い求めいただき、中也などの近現代詩と音楽とのコラボレーションをお楽しみください。

また、平成22年秋には、VOICE SPACEの山口公演を予定しています。

価格:2,000円（税込）
中也の他に谷川俊太郎、佐々木幹郎の詩の楽曲も収録。

2 詩の朗読会 ―心も声も響かせよう

「サーカス」を朗読

昨年に引き続き、山口市中心市街地まちと文化推進事業として、山口市と共催で「詩の朗読会―心も声も響かせよう」を開催しました。10月24日（土）の午後2時から、山口市米屋町商店街みずほ銀行前広場の特設ステージで、沢山の方々に朗読していただきました。

参加していただいたのは、山口市立湯田小学校の児童、山口市立大殿中学校と山口大学教育学部附属山口中学校の生徒、NHK文化センター山口教室「楽しい朗読」の受講生の方々。

山口市在住の歌手、よしもとあいさんに司会をお願いし、中原中也賞受賞詩人の長谷部奈美江さんと、北九州の演劇集団「交差転プロジェクト」の安孫子多香子さん、堀正美さん、安部聡一郎さん、渡邊幸一さん〈クラシックギター〉にも、特別ゲストとしてご出演いただきました。

21名がそれぞれ、自作の詩、中也の詩、谷川俊太郎や金子みすゞ、茨木のり子などの詩を朗読。時には、音楽や歌、演劇も交え、すばらしい舞台を創ってくださいました。

最後は、引率の先生やゲストの方々、福田百合子名誉館長や中原豊館長も一緒に「サーカス」の詩を朗読し、「ゆぁーん　ゆよーん　ゆやゆよん」の響きに商店街を往きすぎる人が足を止めていました。

3 特別企画展「月光とメルヘン」関連イベント

特別企画展「月光とメルヘン」の関連イベントとして、絵本づくりのワークショップと映画の上映会を開催しました。

ワークショップは計3回行いました。講師は、手づくり絵本の会代表の山口智子先生。今回は、中也の詩の中でも、展示で取り上げた「月夜の浜辺」と「一つのメルヘン」のどちらか1篇を絵本にしました。

展示室で詩の解説を受けた後、分館会議室で絵本づくりが始まりました。材料からページ割りまで準備万端で、開始早々テキパキと作業する人、まずはじっくり紙と向き合い、おもむろに手を動かし始める人……、思い思いの取り組み方で絵本をつくりあげていきます。作業も半ばになり、迷いから手が止まった参加者に、先生から的確なアドバイスが入り、また手が動き始める……、そんな光景もしばしば見られました。

時間内に完成した人も、残念ながら制作途中で時間切れになってしまった人も、みな中也の詩の世界と向き合い、楽しく時を過ごしていただけたようでした。

ワークショップ風景

映画の上映会は、記念館内のビデオ上映室で計2回行いました。上映作品はジョルジュ・メリエス監督のサイレント映画「月世界旅行」（1902年）です。大砲の弾に人が乗り、月まで飛んでいくという荒唐無稽な筋書きですが、今から百年以上前（中也が生まれる5年前）に、当時は想像するしかなかった月世界を特撮効果を駆使し映像化していることに、驚かれた方が多くいらっしゃいました。

主なできごと（平成21年度　記念館行事記録）　2009年4月-2010年3月

4月22日　企画展Ⅰ「第14回中原中也賞」（～7月20日）

24日　第59回中也を読む会　企画展Ⅰ見学
川上未映子『先端で、さすわ　さされるわ　そらええわ』を読む

29日　生誕祭　空の下の朗読会　（於 記念館前庭）
自由参加の朗読（朗読参加者21名）
まるで六文銭のように　コンサート
（小室等・及川恒平・四角佳子・こむろゆい）

生誕祭

第14回中原中也賞贈呈式　（於 ホテルニュータナカ）
主催：山口市
受賞詩集：川上未映子
『先端で、さすわ　さされるわ　そらええわ』（思潮社）
記念講演「中原中也―フランスへの旅」
講師：佐々木幹郎

30日　中原中也記念館運営協議会

5月22日　第60回中也を読む会
「春の夜」、萩原朔太郎の詩を読む

6月26日　第61回中也を読む会　屋外展示・星の詩を読む
「頌歌」「（僕の夢は破れて、其処に血を流した）」
「道修山夜曲」

7月24日　特別企画展「月光とメルヘン」（～9月27日）

特別企画展オープニング解説

第62回中也を読む会　特別企画展「月光とメルヘン」見学

30日　ワークショップ（及び9月26日）
「中也の詩の絵本を作ろう」　講師：山口智子

8月22日　特別企画展プロムナードトーク＆上映会（及び9月20日）

28日　第63回中也を読む会
「夏の夜」、北原白秋、和合亮一の詩を読む

31日　機関誌「中原中也研究」第14号発行

9月5日　公開講演Ⅰ　（於 ホテルニュータナカ）
「西條八十の世界」
共催：中原中也の会

25日　第64回中也を読む会　月の詩を読む
「幻影」「月の光　その一」「月の光　その二」

30日　企画展Ⅱ「湯田温泉物語」（～12月13日）

10月22日　中也命日、お墓参り

お墓参り

23日　第65回中也を読む会　命日企画
「四行詩」「秋の夜に、湯に浸り」を読む

24日　「詩の朗読会―心も声も響かせよう」
（於 山口市米屋町商店街みずほ銀行前広場）
共催：山口市

11月12日　天皇陛下御在位20周年記念慶祝（無料開館）

17日　中原中也記念館運営協議会

27日　第66回中也を読む会　企画展Ⅱ「湯田温泉物語」見学
「温泉集」を読む

12月16日　企画展Ⅲ「収蔵資料展」（～H22年4月18日）

23日　湯田温泉 X-mas 湯らぎ狐（コン）サート　（於 記念館外庭）
主催：湯田地区商工振興会

25日　第67回中也を読む会　企画展Ⅲ「収蔵資料展」見学
「生ひ立ちの歌」を読む

1月22日　第68回中也を読む会　音楽鑑賞
「雪の宵」「雪が降つてゐる……」

プロムナードトーク

30日　公開講演Ⅱ　（於 ホテルニュータナカ）
「死と哀悼」　講師：栗原敦

2月10日　第7回常設テーマ展示「『山羊の歌』まで」（～H23年2月13日）

18日　開館記念日　常設テーマ展示プロムナードトーク

26日　第69回中也を読む会　常設テーマ展示「『山羊の歌』まで」見学

3月3日　山口お宝展（中也書簡、中也詩集の特別展示）
（～4月4日）
主催：山口商工会議所

26日　第70回中也を読む会　屋外展示・星の詩を読む
「幼獣の歌」「野卑時代」

31日　館報第15号発行

中原中也の会

5月30日　中原中也の会第13回研究集会　（於 日本近代文学館）
研究発表：「翻訳詩の周辺―立原道造・中原中也―」
発表者：名木橋忠大
研究発表：「未発表詩篇をめぐって
―「ノート1924」という磁場―」
発表者：佐藤元紀
司会：渡邊浩史
テーマ「太宰治と中原中也」
講演「日本語の冒険　太宰治と中原中也」
講師：高橋源一郎
シンポジウム「道化とその背後
―1930年代の太宰治と中原中也」
パネリスト：東郷克美、北川透
司会：傅馬義澄

7月31日　会報第26号発行

9月5日　中原中也の会第14回大会　（於 ホテルニュータナカ）
テーマ「西條八十とモダン日本」
講演「西條八十の世界」　講師：筒井清忠
アトラクション　女声合唱団　リリカ・ヴォカーレ
シンポジウム「西條八十と中原中也
―大衆文化の成立と流行をめぐって」
パネリスト：樋口覚、西村将洋
司会：佐々木幹郎

6日　中原中也の会第10回セミナー
（於 ホテルニュータナカ・中原中也記念館）
講演「中原中也　フランスへの旅」　講師：佐々木幹郎
特別企画展「月光とメルヘン」探訪　解説：那須香、池田誠

12月25日　会報第27号発行

2月13日　日仏合同企画『中原中也―日仏近代詩の交感』記録集発行

◎第15回中原中也賞

Chuya Nakahara prize

『適切な世界の適切ならざる私』

文月悠光（ふづきゆみ）氏

第15回中原中也賞は、170冊の応募詩集の中から、文月悠光氏の第1詩集『適切な世界の適切ならざる私』（思潮社）が選ばれました。文月氏は受賞当時18歳の高校生で、詩集に収められているのは、14歳から17歳の間に書いた作品です。すでに2008年第46回現代詩手帖賞を受賞しています。選考会では「若い敏感で痛々しい女性の身体感覚で世界を触っている。その詩のやわらかく伸びやかな姿が、現代詩という枠を超えた広い共感の場所を作りだしていた。」と評価されました。

詩集のあとがきには「〝詩〟とは、紙に整列する活字ではなく、日常の中で心や身体に起きる、生きた〝現象〟である。」と書かれています。

その言葉そのままに、若い一人の敏感な女性が、現在をしっかりと生き、感じている、そのあかしのような詩の言葉です。

若い、すばらしい才能に、今年も中原中也賞が冠されました。

お間違えのないように願う。確かに私は飛べず踊れずの一少女。だが、ひとたび活字の海に身をまかせれば、水をふるわせ、躍る。それこそ足になろう、ふくらはぎになろう、五本指の貝殻で踏みしめよう。指の先までことばとなろう。まなざしの四肢を引き寄せて、共に舞う。ロンドだ。この手は彼らを誘い込むことも、旅立たせることもいとわない。これが舞うということか。浮上するということか。たとえ、また心無い日常の底に引きずり込まれたとしても、そのさだめをかかとで愛撫し、さらに上へ。海原から顔を出してひとり、息継ぎのロンド！　その度に息を奪われるさだめと闘い、まぶたの裏側で躍りつづけよう。日常とロンドのはざまで、ことばとなって喘いでいたい。

（「ロンド」より）

◎平成22年度 記念館関連行事予定　2010年4月–2011年3月

4月21日	企画展Ⅰ「第15回中原中也賞」（～7月19日）	7月23日	特別企画展「河上徹太郎と中原中也ーその詩と真実」（～10月3日）	10月22日	中也命日・お墓参り
4月29日	生誕祭　空の下の朗読会（於 中原中也記念館前庭）〈無料開館日〉	9月18日	中原中也の会第15回大会（於 ホテルニュータナカ）	平成23〈2011〉年 1月26日	企画展Ⅲ「中也が読んだ本」（～4月17日）
5月5日	こどもの日〈無料開館日〉	9月19日	中原中也の会第11回セミナー（於 ホテルニュータナカ）	2月16日	第8回常設テーマ展示「詩と故郷」（仮）
6月26日	中原中也の会第14回研究集会（於 日本近代文学館）	10月6日	企画展Ⅱ「中也の住んだ町ー中野・高円寺」（～平成23年1月23日）		

※日程等、変更の場合もございます。

中原中也記念館 館報【第15号】平成22年3月31日

発行◎ 中原中也記念館　〒753-0056 山口県山口市湯田温泉1丁目11-21 TEL083-932-6430 FAX083-932-6431 E-mail:chuyakan@c-able.ne.jp http://www.chuyakan.jp/

環境に配慮し、用紙には再生紙を使用しています。印刷インキは植物性大豆油インキを使用しています。